

はしがき

前世紀70年代以降、海外の日本語教育は想像を絶するようなテンポで発展し、現在空前の盛況を呈している。2013年7月8日に発表された国際交流基金の調査によれば、2012年現在、日本語学習者は海外の136カ国・地域で3,984,538人に達し、1979年（127,367人）の約30倍に増加している。日本語教育機関の数は1,145箇所から16,045箇所に（約14倍）、日本語教師の数は4,097人から63,771人に（約16倍）増加している。そして、学習者数上位3位の国は、1位が中国（1,046,490人）、2位がインドネシア（872,406人）と3位が韓国（840,187人）である。現在、海外の日本語教育は、規模が拡大するとともに、教育環境・教師の資質・教材開発・教授法の更新ならびに教育の質と水準などにおいても向上している。

このような背景の中で、注目に値するのは、21世紀以来、海外では言語学・文学・社会文化等を含む日本学を専攻する大学院での人材養

識と海外への学術支援と社会貢献に対する高い関心による賜物である。これだけ多数の日本国内の最先端の研究者がわれわれ海外の研究者と手を携え、共通の目標を目指して、これほどスケールの大きい日本学研究叢書を作成し出版することは、嘗て見られなかったことである。このことは日本学の国際化を促進し、海外での日本学研究の発展に学術支援を提供する上で、きわめて重要な歴史的意義があり、特筆すべき輝かしい一頁を残すことができると思われる。

次に、この叢書の出版を引き受けてくれた外語教学与研究出版社にお礼を申し上げたい。収益を重視する経済社会の観念と法則が一般常識になっている現在では、ベストセラーとは程遠い言語・文学・文化の3系列にわたるこの16巻編成の巨大叢書を出版したいという無理なお願いに対して深い理解を示し、様々な困難を克服した上で最終的にこの条件の出版を引き受けてくれることを決定した。それは学術を重視し、国際支援と社会貢献に対する当社の格別な認識がなければ、到底考えられないことであろう。そして、外語教学与研究出版社の多言語出版部の薛豹主任は全力を挙げてこの出版企画を支持してくれ、途中で挫折することなく、終始編集委員会と力を合わせて本叢書の刊行をサポートしてくれた。

また、この叢書の出版助成を求めたり、東京で中日編者会議を準備して開催する際には、事務局長の李大清氏から多大な協力と支援を頂いた。ここで深くお礼申し上げます。そして、本書の刊行のために多くの時間と労力をつぎ込んでくださった外研社多言語出版部の劉宜欣女史にも合わせて謝意を捧げたい。

今後、この叢書の各巻は逐次刊行されることとなる。もし、グローバル化の時代を反映する本叢書の出版によって、中国ならびに海外各国の日本学研究の普及と発展が促進され、海外で直面している日本学の学術指導書の不足の改善に少しでも寄与することができれば、編者と執筆者全員にとってこれに過ぎたる喜びはない。

2014年7月

編者代表
張 威

模倣者を生み出した。また三好は同時代の作家・作品に対しても、研究者という立場からジャンルを問わず活発な関心を寄せ、「近代文学」の「研究」対「現代文学」の「批評」という二項対立ではなく、広く「近現代文学」としての連続性を当然のこととしていた。その意味で、アカデミズムの立場から「近現代文学」という場合、三好のスタンスを見逃すわけにはいかない。

三好のこうした方法論と文体、とりわけ「作品論」を定立するという立場は、「文庫本1冊でできる研究」と揶揄され、それがはたして「研究」といえるものなのかどうかという「実証学者」からの批判を引き起こすことにもなったが、三好は「作品論が本質として作品の内部へむかう作業だとしたら、作品論の方法を問う試みは、批評主体がいつどこで作品の外部へ身をひるがえすかをも問わねばならぬ」（「作品論の方法」『国文学』1968年7月）と述べて、限定的ながら「作品論」がその内部に閉じ込められた、出口のないものとなることを否定していた。しかし、三好流「作品論」が追隨者・模倣者を生み出すことによって、この時期、「近現代文学研究」の方法が、「実証」対「精読」という対立図式の中におかれることとなったのは否定できない。

「実証」と「精読」、いずれにしても、その対象となる「文学作品」そのものの確実性は、疑われることはなかった。いわば作品は自明のものとして研究者共同体の前に厳然と存在していたわけであり、「文学」なるものの大枠についてが疑問にさらされることはなかったといっている。その意味で、「実証」を標榜するにしても「精読」を標榜するにしても、「文学」の立場という大前提は揺らぎようもなかったのである。むしろ「実証」対「精読」という対立図式を乗り越えるような発想は、こうした対立図式の中にとどまる限り、出て来ようもなかったのだ。かくして、その対象となっている「文学」そのものの存立基盤が問われることなしに、「実証」的「研究」論文や、「作品論」が大量に生産されていくという事態が生ずること

れたバルト¹、フーコー²、デリダ³、ラカン⁴らの知見が、ある時は比較的生なかたちで、またある時は十分に消化・吸収されたかたちで前田の理論の中に登場してくる。

前田の都市空間と文学についての理論の核心をなすのが、バルトに触発された「テキスト」論の立場であろう。現実の都市空間についてのさまざまな言説の集合をテキストとし、そこから切りだされたメタ・テキストとしての文学テキストに表象される都市空間の特性を探るという方法自体が、「テキスト」という概念の拡張・発展によって特徴づけられていることは明らかであろう。

前田は『都市空間のなかの文学』の序論をなす「空間のテキスト テキストの空間」の中で、ロトマンの空間モデル⁵を援用しつつ、文学の中に現れる空間のもつ境界性についての指摘を行っている。これは文学の本質を〈越境〉に見るという考え方に発展する芽として、後の前田の物語論に結びつく重要な論点となるが、ここで一つの理論上の問題が生じることとなった。それは文学において「空間」

-
- 1 ロラン・バルト著、篠沢秀夫訳『神話作用』東京：現代思潮社 1967 年、渡辺淳等訳『零度のエクリチュール』東京：みすず書房 1971 年、沢崎浩平訳『S/Z』東京：みすず書房 1973 年、沢崎浩平訳『テキストの快楽』東京：みすず書房 1977 年、花輪光訳『物語の構造分析』東京：みすず書房 1979 年。
 - 2 ミシェル・フーコー著、中村雄二郎訳『知の考古学』東京：河出書房新社 1970 年、渡辺一民等訳『言葉と物』東京：新潮社 1974 年、『性の歴史Ⅰ 知への意志』東京：新潮社 1987 年、清水徹等訳『作者とは何か？』（文学論集Ⅰ）横浜：哲学書房 1990 年。
 - 3 ジャック・デリダ著、高橋允昭訳『声と現象』東京：理想社 1967 年、足立和浩訳『根源の彼方に——グラマトロジーについて 上・下』東京：現代思潮社 1972 年、高橋允昭訳『ポジション』東京：青土社 1981 年。
 - 4 ジャック・ラカン著、宮本忠雄等訳『エクリⅠ～Ⅲ』東京：弘文堂、1972～81 年。
 - 5 ユーリー・ミハイロビッチ・ロトマン著、磯谷孝編訳『文学と文化記号論』東京：岩波書店、1979 年。

そこまでにいたる「フェミニズム批評」「ジェンダー論批評」の歴史的な総括を行い、その達成と限界とを明らかにした上で、きわめて明確な問題意識と対象画定とをもって、みごとに夏目漱石の言説の「ジェンダー論」的問題点を明らかにしている。今後漱石を論じるにあたって、女性・男性を問わず研究者必見の書であるとともに、単に漱石論にとどまらず、研究上の「ジェンダー」イデオロギーを巡る立場の選択を、読者に鋭く迫る労作と評価できるだろう。現時点における「ジェンダー論批評」の水準を示すものとして、注目すべき本である。

3. 「ポスト＝コロニアリズム」「多言語主義」の影響

90年代も半ばにさしかかったころ、海外の研究動向を通じて「文化研究」とともに脚光を浴びたものに「ポスト＝コロニアリズム」の問題意識による諸批評がある。「カルスタ」（「文化研究」の揶揄的表現）とともに「ポストコロ」などとお手軽に呼ばれるようになってしまった「ポスト＝コロニアリズム」であるが実際はそのような軽々しさとは無縁の、現代の重要問題を取り扱う研究方法である。日本にあっては、それは明治維新以来の「国民国家」形成過程での、「地方」抑圧、植民地侵略の文化的歴史を中心として展開されることになる。

田中克彦は、言語社会学の分野で早くからこうした問題を取り上げていたが、その門下生である林正寛の「多言語主義」についての研究¹、イ・ヨンスク²らの仕事、あるいは酒井直樹³の仕事などが、現在もっともアクチュアルなテーマを扱った研究として脚光を浴び

1 田中克彦等編『言語・国家、そして権力』名古屋：新世社1997年、三浦信孝編『多言語主義とは何か』東京：藤原書店1997年。

2 イ・ヨンスク『「国語」という思想——近代日本の言語認識』東京：岩波書店、1996年。

3 酒井直樹『死産される日本語・日本人——「日本」の歴史－地勢的配置』東京：新曜社、1996年。

腕として座談会の本文構成に言語に尽くせぬ貢献をした渡辺昭夫も、また多彩なゲストの何人かもすでにこの世を去り、この『座談会昭和文学史』自体がいまや歴史化されるような状況となってきた。すでに述べてきたような角度から見て、『座談会昭和文学史』の意義は今日ますます大きくなっていると思われるが、もちろんこの達成にしても、また『日本文学史序説』にしても、それぞれが完璧な「昭和文学史」であるわけではない。「昭和文学史」に続く「平成文学史」がなぜ現れてこないのか、そもそも「昭和文学史」として「明治 - 大正 - 昭和 - 平成」という時代区分を採用し、出来事の因果関係を明らかにしていくという「史」の方法に、見直しの契機はないのか、という問題が、ここで改めて浮上してくるであろう。

加藤の言葉を再度引用するなら、「史」とは「前の事実を踏まえて後の事実の生じる一すじの流れ、またはその意味での発展を明らかにしようとする試み」ということになる。それは出来事と出来事の間を因果律、論理の必然で結んで記述しようとする企てであり、その動因は「前の事実」に、結果は「後の事実」に求められることになる。その場合「歴史」とはそもそも「整然と継起した出来事を、因果律を踏まえて記録する」という枠組みに嵌められたものとなり、加藤のいう「発展」、さらに矮小化して理解するなら、いわゆる「進歩」を、その記述の当然の前提とすることになりかねない。加藤はそのことの持つ危うさを認識して、次のようにも述べている。

文学作品は、それ自身で完結した一面をもち、歴史を超越する面を含む。文学は、時代の文化の一部分であると同時に自己完結的な、歴史的であると同時に超歴史的な現象である。著者は、文学史においては、文化の一部分としての文学作品の歴史的な面に注目し、個別的な作家や作品を詳しく論じるときには、その自己完結的な面を強調して、歴史を超える面に及ぶのである。¹

1 加藤周一『日本文学史序説（下）』東京：筑摩書房、1980年、493頁。

三、日本近現代文学研究の今後

——日中共同の立ち位置の模索

1. 「日本」への疑い

本稿に残された課題は、「日本近現代文学」研究の日中両国における今日的意義の解明である。無論この課題は上述した日本における研究の歴史と現状に密接に関連する。特にⅡで述べた三つの論点は、それぞれが「日本」「近現代」「文学」という境界の解体と再構築にあたって、相互に関わりあうものであり、ここに中国からの視点を導入することによって、新たな視野が開けてくる可能性がある。

まず問い直されるべきことは、「日本近現代文学」というタームを構成する第一の要素、「日本」の自明性であろう。

中国と対比して日本を考える場合、中国の広大さ・多民族性に対して、島国・日本の地域的なまとまりと、単一民族・単一文化・単一言語性が前提とされるのが一般的であろう。少なくとも近現代文化言語としての日本語の均質性について、その発生にまで遡って問われる機会は多くなかったろうと思われる。しかし小熊英二が明らかにしたように¹、幕末・維新から日清・日露戦争を経て戦前の中国侵略・「満洲国」建国にいたるまで、日本は多民族を内包する帝国として成立していた歴史を持つ。また、ことを言語・文化の問題に絞ったとしても、近現代日本語・日本文学の形成過程で、アイヌをはじめとする北方少数民族、琉球人、東北在住者、被差別部落住民、各種障害者、女性、子ども、さらにアジアの被侵略国民など、さまざまな表象を差別・抑圧したうえで、統一的な言語や文学が成立したとの認識も深められつつある。このような経過をたどって形成された「日本」という表象は、「近現代」という概念や「文学」の外

1 小熊英二『単一民族神話の起源——〈日本人〉の自画像の系譜』東京：新曜社、1995年。

研究者たちによる「谷崎潤一郎パリ国際シンポジウム」の成果をまとめた論文集で、従来のアカデミックな枠組みを脱し、谷崎文学の斬新な読解を提示しようとするものである。

近年、中国学界も谷崎の中国体験・中国趣味に注目するようになってきた。成果としては、秦剛「上海小新聞の一記事から中日文壇交渉を探る——谷崎潤一郎・芥川龍之介の上海体験の一齣」（『日本近代文学』75、2006年11月）、秦剛「芥川龍之介と谷崎潤一郎の中国表象——〈支那趣味〉言説を批判する『支那遊記』」（『国語と国文学』、2006年11月特集号）、李雁南《谷崎潤一郎笔下的中国江南》（《解放军外国语学院学报》、2009年2期）などが挙げられる。

他方、中国近現代文学における谷崎文学の受容について、王向遠《日本唯美主义与中国现代文学中的唯美主义》（《外国文学研究》、1995年4月）は、谷崎潤一郎の文学は郭沫若、郁達夫、田漢、滕固など日本留学の経験を持っている作家に影響を与えたと論じている。ほかの論として、趙京華《周作人与永井荷风、谷崎潤一郎》（《中国现代文学研究丛刊》、1998年2期）が挙げられる。

現在の日本の谷崎研究は多岐に渉り、学者たちは新たな資料を発掘し、新たな視野から斬新な谷崎潤一郎像を構築しているといえよう。前掲の作品論及び比較的研究以外には、伝記的研究として、三島佑一『谷崎潤一郎と大阪』（大阪：和泉書院、2003年）、末永泉『谷崎潤一郎先生覚え書き』（東京：中央公論新社、2004年）、小谷野敦『谷崎潤一郎伝：堂々たる人生』（東京：中央公論新社、2006年）、渡辺千萬子『落花流水：谷崎潤一郎と祖父関雪の思い出』（東京：岩波書店、2007年）が発行されている。また、研究の入門書としては、千葉俊二編『谷崎潤一郎必携』（東京：学灯社、2001年）、山口政幸『谷崎潤一郎』（東京：勉誠出版、2004年）などが挙げられる。

3

中国では夏目漱石が最も評価される日本作家の一人であると言える。2000年以前の翻訳史と研究史は王成《夏目漱石文学在中国的翻译和研究》（《日语学习与研究》、2001年1期）、王向遠《八十多年来中国对夏目漱石的翻译、评论和研究》（《日语学习与研究》、2001年4期）、王志松《夏目漱石文学在中国的研究》（《俄罗斯文艺》专刊、2002年）に詳しい。簡潔にまとめれば、中国における漱石研究は四つの時代に分けられる。第一の段階は1949年新中国の成立以前の研究である。周作人、魯迅をはじめとする学者たちは主に「余裕派」の角度から漱石作品をとらえた。そのため、「余裕派」の代表作とされる『草枕』や『倫敦塔』などの前期作品は漱石作品のなかで最も早く翻訳された。張我軍が訳した『文学論』（上海：神州国光社、1931年）は現在まで唯一の『文学論』訳本として評価されるべきである。第二段階は1949年から1980年代前半までの研究である。イデオロギーの強い影響で夏目漱石をブルジョア社会への批判者としてとらえる傾向が強かった。

第三段階は1980年代中期から新世紀のはじめまでである。1985年何乃英の《夏目漱石和他的小说》（北京：北京出版社、1985年）は中国で最初の漱石研究論著として出版されている。この時期、研究者は作品が表した思想や主題についてのイデオロギー的な研究からテキスト自身に関心を持つようになり、文学的な「読み」に着眼しはじめている。李国棟《夏目漱石文学研究主脉》（北京：北京大学出版社、1990年）などの研究はこの方面の代表作と言える。比較文学の角度からの論考はこの頃からブームになった。楊曉文《夏目漱石与丰子恺》（《吉林大学社会科学学报》、1993年1期）、王向遠《魯迅的〈野草〉和夏目漱石的〈十夜梦〉》（《魯迅月刊》、1997年1期）などが示唆的な論文である。掲侠《夏目漱石的中国观》（《日本学论丛Ⅱ》、1991年12月）は漱石の中国観の限界を指摘しているが、劉建輝「漱石と「満州」——「下等遊民」発見の旅」

（『解釈と鑑賞』、1997年6月）は「満州」「下等遊民」の発見を切り口として漱石文学を再検討しようとしている。何少賢は漱石文学理論について一連の論文と著書《日本現代文学巨匠夏目漱石》（北京：中国文学出版社、1998年）を刊行している。『文学論』に関する代表的な論文としては王志松「『文学論』——「文学的言語表現」と「自己」への探求」（『解釈と鑑賞』、1997年6月）が挙げられる。

2000年代以後、漱石研究はより豊かな様相を呈し、第四段階に入った。王志松「漱石の『道草』『明暗』——その「過去」の断片化と断絶化をめぐって」（『日本学研究』10、2001年8月）、「漱石の「小説組立て論」——『虞美人草』との関連で」（『日本学研究』11、2002年5月）、「漱石文学と「超自然的事物」——日本近代文学の想像力への一視座」（『日本学研究』14、2004年10月）と王成「「草枕」論——その禅学的側面をめぐって」（『日本学研究』9、2000年11月）、「明治期における演説と修養——夏目漱石の修養論のために」（『日本学研究』14、2004年10月）、（《夏目漱石の満韓游记》（《读书》333、2006年第11期）などの一連の論文は新世紀の漱石研究の代表的な成果だと言える。また、高寧《虚像与反差——夏目漱石精神思想探微》（《外国文学评论》、2001年2期）は漱石の政治思想の「忠君愛国」の要素を指摘し、漱石像を再評価する必要があると説いた。祝振媛《夏目漱石の漢詩と中国文化思想》（北京：中国书籍出版社、2003年）は漱石の漢詩と中国文化のつながりを分析している。張小玲《夏目漱石与近代日本的文化身份建构》（北京：北京大学出版社、2009年）は漱石の文化価値を近代日本のカルチュラル・アイデンティティーの問題に絡めながら、文学理論、写生文、語りなどの角度から詳細な分析を展開している。比較文学的研究が中国の漱石研究界で盛んに行われてきたが、方長安《以他者话语质疑、批评“五四”文学非写实潮流——成仿吾对夏目漱石〈文学论〉的借用》（《武汉大学学报哲学

を分析し、思想史において啄木の散文全体を位置づける試みを示している。評論の研究としては、上田博・田口道昭『啄木評論の世界』（京都：世界思想社・1991年）が、細かな注釈的読解を試みている。

『一握の砂』の短歌は、自然主義的な告白として理解されてきたこともあり、これまでは、短歌史においては啄木短歌は、生活派の源流とされ、傍系的に扱われることが多かった。最近の研究の進展によって、日常の中の心の微細な動きを捉える歌風は、近代短歌の主流であり、巧緻な編集によって歌集が組み立てられていることが認識されるようになった。藤沢全『啄木哀歌とその時代』（東京：桜楓社、1983年）は、岩城之徳の業績を基盤にしつつ、歌集『一握の砂』の編集過程の詳細を考察している。太田登『啄木短歌論考 抒情の軌跡』（東京：八木書店、1991年）は、視線の働きから啄木短歌を解説する試みで、自然主義的素材の背後にある意識の劇に注目している。『和歌文学大系 77 一握の砂／黄昏に／収穫』（東京：明治書院、2004年）における歌集『一握の砂』の注釈（木股知史執筆）は、これまでの研究史を整理しつつ配列や編集の表現効果について分析している。近藤典彦『『一握の砂』の研究』（東京：おうふう、2004年）は、印刷版面に編集的意図が現れていると指摘し、大逆事件との関連も分析している。三枝昂之『啄木 ふるさとの空遠みかも』（東京：五柳書院、2009年）は、1910年代の短歌に共通する日常の何げない瞬間をとらえるモチーフが、自我の詩としての近代短歌の主潮をなすとして、その中核に啄木を位置づける試みである。三行書きの表記については、さまざまな議論があって定説がないが、望月善次『啄木短歌の方法』（盛岡：ジロー印刷企画、1997年）が研究史の情報をまとめている。

初期の詩の研究としては、堀江信男『石川啄木論考』（東京：笠間書院、1971年）が、詩集『あこがれ』の背後の実践的詩人観念を分析している。小川武敏『石川啄木』（東京：武蔵野書房、1989年）が、詩稿「呼子と口笛」について時代とのかかわりから詩を分析し

実篤および彼が提唱する新しき村思想も自然に再び中国研究者の注目対象となった。そして、90年代に入ると、長い間タブー視されてきた周作人研究が次第に解禁され、それに伴って、周作人との交流関係から武者小路研究を展開するものが多く見られる。代表的な論を挙げれば、銭理群《周作人传》（北京：北京十月文艺出版社、1990年）、劉岸偉『東洋人の悲哀——周作人と日本』（東京：河出書房新社、1991年）、劉立善《日本白桦派与中国作家》第二章（沈阳：辽宁大学出版社、1995年）、王向遠《日本白桦派作家对鲁迅、周作人影响关系新辨》（《鲁迅研究月刊》、1995年1期）、秦弓《日本白桦派与中国作家》（《文艺研究》、1997年1期）、林濤「周作人と武者小路実篤——『人間の文学』と『自己の園地』に見る『新しき村』の精神——」（『日本女子大学大学院文学研究科紀要』、1998年3月）、董炳月《周作人与〈新村〉杂志》（《中国现代文学研究丛刊》、1998年2期）、于耀明『周作人と日本近代文学』（東京：翰林書房、2001年）、林恒青《武者小路实笃与周作人的诗歌交往》（《福建师范大学学报》、2002年3期）、董炳月《梦与梦之间——中国新文学作家与武者小路实笃的相遇》（《鲁迅研究月刊》、2003年2期）などである。もっとも、林恒青《“新村”与武者小路实笃——作为文学家的社会实践》（《福州大学学报》、2004年4期）、鮑耀明《武者小路实笃・新村・叶绍钧与我》（《鲁迅研究月刊》、2009年12期）、劉立善《武者小路实笃“新村”的发展途程》（《日本研究》、2010年2期）などのような周作人との関係から論ずる方法から脱却し、実篤を単独の考察対象、或いは他の中国作家との関係から研究する論も近年現れてきた。また、実篤作品の翻訳と中国における受容の視点から考察している論としては、王向遠《对武者小路实笃的翻译》（《二十世纪中国的日本翻译文学史》、北京：北京师范大学出版社、2001年）、林濤《武者小路实笃作品在中国的翻译与接受》（《日本翻译文学论文集》、北京：人民文学出版社、2004年、95-118页）、楊英華《关于鲁迅翻译

（東京：文芸春秋新社、1954年）などの優れた論が出た。やや遅れて出てきたのは伊沢元美「志賀直哉のリアリズム」（『島根大学十周年記念論文集』、1960年2月）、須藤松雄『志賀直哉の文学』（東京：南雲堂桜風社、1963年）、安岡章太郎『志賀直哉私論』（東京：文芸春秋社、1968年）などである。後に、『国文学』（1976年3月）の特集「志賀直哉と日本人」や高橋英夫「見つづ畏れよ」（『新潮』、1972年9月）や饗庭孝男「志賀直哉」（『近代の解体——知識人の文学』、東京：河出書房新社、1976年）なども志賀研究の要所を得たものである。

次に、作品論では代表的なものとして、松島秀三「志賀直哉の文芸」（Ⅰ・Ⅱ）（『季刊歯車』、1956年12月）、大石修平「殺されたる範の妻」（『日本文学』、1960年5月）、紅野敏郎「志賀直哉・鑑賞」（『鑑賞と研究 現代日本文学講座小説（4）』、三省堂、1962年7月）などが挙げられる。中でも殊に前記大石氏の論は志賀の初期作品から『暗夜行路』までを通覧し、『城の崎にて』に〈転回〉の契機を求めながら、〈死〉・〈惨劇〉が志賀文学に〈普遍的に認められる〉と論じた極めて啓発的なものである。

この頃から1970年代にかけて『暗夜行路』の問題はますます議論され、作品論の隆盛とも呼応し、創見に満ちた論が続出した。成立事情に注目した関良一「『暗夜行路』」（『国文学言語と文芸』、1961年7、9、11月）が〈直道的なものと直温的なものとの和解〉にモチーフを探り、遠藤祐「『時任謙作』から『暗夜行路』へ——その『移転』の意味について」（『文学言語』、1963年3月）がその移転過程の〈必然の契機〉を『城の崎にて』の生死観・運命観との関係で論じた。更に、三好行雄「仮構の〈私〉——『暗夜行路』志賀直哉」（『作品論の試み』、東京：至文堂、1968年）が鋭敏な解読によって、作品構造の精緻な論証をし、小説の中断期間は〈志賀の個性が実生活で円熟し、調和的な心境を確認するための時間〉であったと主張した。同時期、竹盛天雄「『暗夜行路』素描—抽象

的独立人の誕生・変形・連環的持続の芸術―」（『日本近代文学』、1965年11月）が前・後篇を〈同一主題の変形〉と認め、統一的把握の視点として、〈連環的持続〉という見解を示して注目を浴びる。遠藤祐『日本近代文学大系（31）』（東京：角川書店、1971年）は、「暗夜行路」その他四篇に精密な注解を施したもので、志賀研究の土台をなお更に固めたものだと言えよう。ほかに、町田栄「いわゆる『時任謙作』の形成と分裂」（『日本近代文学』、1970年10月）、池内輝雄「志賀直哉『ある男、その姉の死』論」（『大妻女子大学文学部紀要』、1972年3月）など、次世代による継続的な研究もすばらしい成果を実らせている。

新しい志賀直哉全集刊行後、『国文学』（1976年3月）の志賀特集に、草稿・未定稿を生かした論考が多数現れ、西垣勤「志賀直哉初期覚え書」（『日本文学研究』、1975年1月）が初期の作品・未定稿を検討し、〈民衆・労働者〉と〈性〉をテーマとした出発期の趨勢を抽出して未定稿の整理を試み、これからの研究はこの全集の活用如何にかかわっていると多くの研究者に思わせた。須藤松雄は前者の増訂版（1976年6月）以下の著作で新見解を発表し、また、草稿から定稿へのプロセスを的確に辿った本多秋五「直哉——『暗夜行路』序説」（『岩波講座文学（10）・表現の方法（7）・研究と批評（下）』、東京：岩波書店、1976年）などの論考もある。柳田知常も初期から『暗夜行路』までの作品を丹念に読み込んだ『志賀直哉の作品』（諏訪：檸檬社、1981年）をまとめた。その他、紅野敏郎『鑑賞日本現代文学（7）志賀直哉』（東京：角川書店、1981年）は行き届いた作品鑑賞を行っており、志賀直哉文学研究のための必携書と言えよう。

更に、阿川弘之のシリーズ「志賀直哉1～78〈最終回〉」（『図書』、1989年1月～1994年12月）や山口直孝の系列論文「志賀直哉文芸」（『日本文芸研究』、1989年1月）などはこれまでの志賀直哉研究に句点を入れると同時に新生面を開くことにもなった。また、紅

1999～2003年）、加藤三重子「志賀直哉「国語問題」の政治学」（『成城国文学』、1999年3月）、富沢成実「志賀直哉と生母銀——母をめぐる美とエロスの風景」（『文学・語学』、2000年5月）、中村智「妻の姦通に欲情する夫——志賀直哉『雨蛙』論」（『山口国文』、2000年3月）、中村智「志賀直哉の朝鮮」（『コンパラティオ』、2001年3月）、田中絵美利「志賀直哉『剃刀』における〈性〉と〈罪〉の相関性——何故〈男〉は〈男〉を殺したのか」（『明治大学大学院文学研究論集』、2001年9月）等はジェンダーやフェミニズム、ニューヒストリズムなどの角度から個性的な論証を行った。上田穂積「志賀直哉における〈音〉と〈声〉——『児を盗む話』を読む」（『国文学研究』、2001年3月）、池内輝雄など「特集志賀直哉——芸術家＝小説家として」シリーズ論考（『国文学』、2002年4月）、亀井千明「志賀直哉『創作余談』に関する一考察——『城の崎にて』をめぐる言説を中心に」（『甲南女子大学大学院論叢』、2002年3月）、金明姫など「特集・二十一世紀の志賀直哉」シリーズ論考（『解釈と鑑賞』、2003年8月）、呉保華「志賀直哉と禅語」（『岡大國文論稿』、2004年3月）、亀井千明「メディアの中で生成される〈私〉——志賀直哉『大津順吉』に見る自己語りの様相」（『阪神近代文学研究』、2004年3月）、小林幸夫著『認知への想像力・志賀直哉論』（双文社出版、2004年9月）、宗像和重「志賀直哉の芸」（『表現と文体』、2005年3月）、内田保男「作家と作品 志賀直哉『赤西蠣太』——登場人物名に隠された意味」（『国語教室』、2005年5月）、丸山隆司「〈大東亜帝国〉への〈行路〉——『暗夜行路』をめぐる」（『藤女子大学国文学雑誌』、2005年3月）、大野亮司「“認めること” “知ること”へと向かうとき——小林幸夫『認知への想像力・志賀直哉論』に関して」（『日本近代文学』、2005年5月）、能地克宜「志賀直哉『暗夜行路』研究文献目録」（『文学1920年代』、2005年4月）、下岡友加「志賀直哉「佐々木の場合」——漱石への献辞の意味」（『近

して矢崎弾、伊藤整、窪川鶴次郎などの作家、文芸批評家による共同研究で、芥川文学の過小評価が目立っている。後者については、もちろん、まとまった芥川研究書として最初の歴史的意義をもつ竹内真の『芥川竜之介の研究』（東京：大同館書店、1934年）などが先行しているが、「文学史家としての客観性をつらぬく実証的な本格研究」（三好行雄）として、芥川研究の第一の基本図書であるといえよう。芥川に関する追憶、回想記の類も、自決直後から現在にいたるまで多くの人々によって書かれている。そのなかで、小穴隆一の『二つの絵—芥川 龍之介の回想』（東京：中央公論社、1956年）が芥川私生児説で大きな問題を投げることになったが、これが後の作家論、伝記研究につながっていく。伝記研究の代表的なものに森本修『芥川龍之介伝記論考』（東京：明治書院、1964年）、後に改訂版『新考・芥川龍之介伝』（1971年）がある。これは膨大な資料によって、できるだけ主観を排した伝記を構築しようとしたものである。これと対蹠的になるのは三好行雄の仕事である。『芥川龍之介論』（東京：筑摩書房、1976年）などで展開された「三好芥川」は「昭和四十年以降の作品論を主導していた」（三島護）とされている。この2冊の他、芥川研究の基本図書としては、菊地弘『芥川龍之介—意識と方法—』（東京：明治書院、1982年）、平岡敏夫『芥川龍之介抒情の美学』（東京：大修館書店、1982年）、海老井英次『芥川龍之介論—自己覚醒から解体へ』（東京：桜楓社、1981年）、関口安義『芥川龍之介 実像と虚像』（東京：洋々社、1988年）、同『芥川龍之介とその時代』（1999年）、関口安義・久保田芳太郎・菊地弘編『芥川龍之介事典』（東京：明治書院、1985年）、関口安義編『芥川龍之介新辞典』（東京：翰林書房、2003年）などを挙げるべきである。芥川研究の進展にともない研究そのものの細分化も進んでいる。歴史小説に焦点を絞った著書に勝倉寿一『芥川龍之介の歴史小説』（東京：教育出版センター、1983年）、石割透『芥川龍之介——初期

文芸家協会と発売禁止にかかわる周到な分析がある。また鈴木貞美『「文藝春秋」とアジア太平洋戦争』（東京：武田ランダムハウスジャパン、2010年）は、「文藝春秋」グループと日中戦争の關係に鋭利な分析を加え、同じく鈴木貞美編『「Japan To-day」研究——戦時期「文藝春秋」の海外発信』（京都：国際日本文化センター、2011年）は、菊池寛責任編集の同誌の翻訳および解説に力を注いでいる。

菊池寛をめぐる展覧会も開催され、その図録に北九州市立松本清張記念館編『松本清張と菊池寛』（2003年）、山梨県立文学館編『文士の友情 芥川龍之介と菊池寛・久米正雄』（同）がある。また、雑誌の特集号には前記記念館による「松本清張と菊池寛」（『松本清張研究』、2001年3月）があり、井上ひさし・平岡敏夫・山田有策の座談会「松本清張と菊池寛」のほか、藤井淑禎「ミステリーの自覚」、片山宏行「『形影 菊池寛と佐佐木茂索』論」、小笠原賢二「反制度の継承」、石川巧「『小説研究十六講』から『小説研究十六講』へ」がある。また「菊池寛再考」（『文学界』、2004年7月）には、井上ひさし・猪瀬直樹の対談「文学と社会 『こころの王国』をめぐる」、片山宏行「菊池寛を恋愛で解く」、半藤一利「松本清張と菊池寛」が掲載されている。

論文に目を転ずると、その数は必ずしも多くはなく、対象となる作品も限定されている。これまでの研究概要は、三島讓「菊池寛」（『明治・大正・昭和作家研究大事典』、東京：桜楓社、1992年）、片山宏行「研究動向 菊池寛」（『昭和文学研究』、1995年2月）にまとめられているが、それ以降の成果を次にあげる。矢橋卓「菊池寛と『父帰る』」（『講座日本の演劇5』、東京：勉誠社、1997年）、井上理恵「家族の残照—菊池寛『父帰る』論—」（『社会文学』、1997年6月）、横谷一子「『忠直卿行状記』の典拠」（『京都語文』、1998年10月）、日高昭二「共同体の資本論——菊池寛再考のために」（『日本文学』、1999年11月）、吉田司雄「競馬で大儲けをする方法—菊池寛『日本競馬読本』とその周辺—」（同）、日高昭二「菊